

さいはてに、世界各地からアーティストが集まり始めた。



石川県珠洲市全域を会場に2017年秋からトリエンナーレ方式で開催している奥能登国際芸術祭。過去2回の芸術祭では、世界各地から現代美術の最先端を担うアーティストたちが、能登半島先端の美しい里山里海、そして祭や豊かな食など、その地に根ざした人々の営みに着目し、このさいはての地・珠洲で作品を展開してきました。「奥能登国際芸術祭2023」に向けて、作品展開候補地の選定、参加アーティストによる珠洲の視察を行うなど、準備が進んでいます。

本プレスリリースでは、「奥能登国際芸術祭2023」に新規作品の出展が決定したアーティストに関する最新情報についてお知らせします。

「奥能登国際芸術祭2023」の参加アーティストが決まる。(2022年12月28日時点)

6の国と地域から9組のアーティストの参加が決まりました。

アナ・ラウラ・アラエズ(スペイン・バスク地方)/ シリン・アベディニラッド(イラン/アメリカ)
アレクサンドル・ポノマリョフ(ロシア) N.S. ハーシャ(インド)/SIDE CORE(日本)
さわひらき(日本/イギリス)/ ジョ・シン [徐震](中国)/ 坂茂(日本)/ ひびのこづえ(日本)

*公募にエントリーしたアーティストも含め、アーティストの選出を進めています。次回は2023年1月にお知らせする予定です。



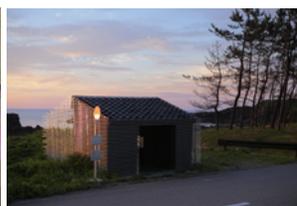
©JASPAR, Tokyo 2022 and Chiharu Shiota
塩田千春『時を運ぶ船』



山本基『記憶への回廊』



ひびのこづえ『スズヅカ』



アレクサンドル・コンスタンチーフ
『珠洲海道五十三次』



ラックス・メディア・コレクティブ
『うっしみ』

ピックアッププロジェクト

坂茂設計、さいはての高台に日本海を望むカフェ・レストラン建設へ



石川県珠洲市大谷町に位置している劇場型歴史民俗博物館スズ・シアター・ミュージアム。この敷地内で計画されているレストランの設計がまとまり、建設に向けて本格的に動き出しました。設計を手掛けたのは坂茂(坂茂建築設計、東京)。

高台からの日本海の眺望を最大限に活かす設計コンセプトから、建物のどこからでも美しい景色を望むことができるよう、海岸線と平行に細長い(幅5m、長さ40m)構造となっています。カフェ・レストランは、屋内客席に加え屋外デッキを設けています。全面ガラス張りで開放的な空間を設けることで、能登半島さいはて「珠洲」の自然や風土をゆっくりと楽しんでいただけます。

「奥能登国際芸術祭2023」開催概要

会期: 2023年9月2日(土)~10月22日(日)

会場: 石川県珠洲市全域(247.20km²)

主催: 奥能登国際芸術祭実行委員会/実行委員長: 泉谷満寿裕(珠洲市長)

総合ディレクター: 北川フラム(アートディレクター)

特別協力: 北國新聞社/後援: エフエム石川/テレビ金沢/北陸放送/ラジオかなざわ/ラジオこまつ/ラジオななほ



【奥能登国際芸術祭に関するお問合せ】

奥能登国際芸術祭実行委員会事務局(担当: 前田)

TEL: 0768-82-7720 / MAIL: info@oku-noto.jp

奥能登国際芸術祭公式HP: <https://oku-noto.jp/ja/index.html>

【スズ・シアター・ミュージアムに関するお問合せ】

珠洲市教育委員会事務局 文化創造室(担当: 河原)

TEL: 0768-82-7780 / MAIL: bunkazai@city.suzu.lg.jp

スズ・シアター・ミュージアム公式HP: <https://www.suzu-stm.jp/>

「奥能登国際芸術祭2023」参加決定アーティスト情報



アナ・ラウラ・アラエズ [スペイン・バスク地方]

Ana Laura Aláez

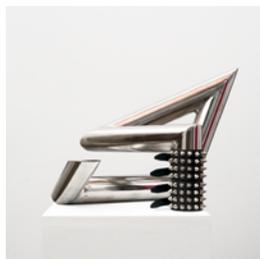
スペイン バスク地方のビルバオ出身。2022-2023年には助成金プログラムによりローマのロイヤル・アカデミー・オブ・スペインに滞在。

2008年、十和田市現代美術館での作品《Bridge of Light》のために初来日。2019年、スペインの「Multiverso-BBVA Foundation」のプログラムにより、映像作品《Queer Bearers: The double and the repetition》の素材撮影のため、再び東京と十和田市を訪れた。この短編映像は、国際ダンス映画祭(2021,2022年)、2021年のポルト・ファム(2021年)、キエフ国際短編映画祭(2021年)などの映画祭で国際的に注目を集め、オーバーハウゼン国際短編映画祭(2021年)で観客賞を受賞した。

2013年には、その芸術的キャリアと現代美術・文化への貢献が認められ、バスク政府から「Gure Artea 賞」を受賞。また、インテリアデザイン、スペイン版「Vogue」「NEO 2」「B-guided」のピクチャーエディターとライターなど、様々な分野で活躍している。また、教育においても積極的に活動し、数多くの講座やワークショップを指導している。音楽デュオ Silvania と共同で、ビデオ作品のために作曲した音楽をまとめたアルバム「Girls on Film」をレコーディング。現在、ミュージシャンの Ascii.disko ともプロジェクトを行っている。

主な展覧会歴：

- 《Queer Bearers: The double and the repetition》ビルバオ美術館（スペイン、2021年）
- 《Bridge of Light》十和田市現代美術館（日本、2008年）
- 個展《Beauty Cabinet Prototype》パレ・ド・トーキョー（パリ、2003年）



LA-NATURALEZA-NO-ESTÁ-DE-NUESTRA-PARTE-REF1-2022



PRIMER-BESO-CON-LENGUA-2022



Sculpture Pavilion, MUSAC, LEON, 2008



シリン・アベディニラッド [イラン / アメリカ]

Shirin Abedinirad

1986年、イラン・タブリーズ生まれ。2002年、絵画の分野で芸術活動始める。テヘランのシャリアティ専門学校でグラフィックデザイン、後にファッションデザインを学び、コンセプチュアルアートとファッションデザインとの重なりについて研究した。この間、イラン各地でパフォーマンスアーツを手がけ、ジェンダー、セクシュアリティ、同情といったテーマを追求するようになる。また、多くの舞台にも出演した。

2012年からは、ビデオアートを制作し、自己とアイデンティティの概念を探求している。パフォーマンスアーツとビデオの両方の分野で、パフォーマーであると同時に、自身の衣装、小道具、セットのデザインも行っている。自然をテーマにすることに魅了されるようになり、2013年、ランドアート、インスタレーション、パブリックアートの制作を開始。2014年3月、United Colors of Benetton のファブリカリサーチセンターで1年間の奨学生に選ばれた。イタリア滞在中、ファブリカの編集部で働きながら、Nazar Publication から出版された「Fashion & Conceptual Art」という本を執筆した。

現在、米国を拠点に活動している彼女の作品は、彫刻、インスタレーション、映像など多岐にわたるが、最もよく知られているのは鏡を用いた大型の作品である。鏡を一種の窓として使い、それを通して、かつて存在したより良い世界を鑑賞者に見せている。これまでに、タイムズ・アート・ミュージアム(北京 / 成都)、ミュージアム・オン・ザ・シーム (エルサレム)、マナ現代美術館 (ニュージャージー)、ヴェネツィア・ビエンナーレ、アンドラ・ランドアート・ビエンナーレなど、国際的な舞台で作品を展示している。

主な展覧会歴：

- タイムズ・アート・ミュージアム（北京 / 成都）
- ミュージアム・オン・ザ・シーム（エルサレム）
- マナ・コンテンポラリー・ミュージアム（ニュージャージー）



Pyramid, 2022, Trabzon Girls Monastery, Trabzon, Turkey



Tide #2, 2022, Times Art Museum, Beijing, China



アレクサンドル・ポノマリョフ [ロシア]
Alexander Ponomarev

1957年ドニエプロペトロフスク(旧ソ連)生まれ、モスクワ在住。
オリョール美術学校卒業後、海に憧れて航海士となり、7つの海を旅する。1982年に美術界に戻り、海、船をテーマとする作品を展開。2017年にはコミッショナーとして第1回南極ビエンナーレを実施した。ヴェネツィア・ビエンナーレ、ヴェネツィア建築ビエンナーレでも多数プロジェクトを発表し、ポンピドゥー・センター、ルーブル美術館等、各国の美術館で展示をう。
「瀬戸内国際芸術祭 2016」、「大地の芸術祭 2018」、「夢みる力——未来への飛翔ロシア現代アートの世界」(市原湖畔美術館、2019)など、日本でも作品を展開。

主な展覧会：
「岸はない」モスクワ市美術館、2022年
「Windtruvian Man」プーシキン美術館、2015年
「船の復活」トレチャコフ美術館、1996年

主な賞歴：
フランス芸術文化勲章叙勲



Ouroboros -Egypt 2021



The Flying Ship -Austria 2018



Carillon of the Pacific Ocean (Monument to those who did not return from the ocean)



N.S. ハーシャ [インド]
N.S. Harsha

1969年インドマイソール生まれ。マイソールを拠点に活動。2012年にDAADのベルリン芸術家プログラムに選出、2008年にはアルテス・ムンディ賞を受賞。
近年では、バリ島で開催された第17階G20首脳会合に合わせて開催されたグループ展《Constellations: Global Reflections (CGR)》に参加。

インドを始めとして、アメリカ、ロンドンなど世界各地で個展やグループ展に参加。日本では森美術館、メゾンエルメス東京、横浜トリエンナーレ、堂島ビエンナーレなどに参加経験がある。

代表的な展覧会歴・受賞歴：
- 個展
《N.S. Harsha: Facing》グリーン・ヴィヴィアン・アート・ギャラリー(ウェールズイギリス, 2018年)
- 個展《N.S. ハルシャ展：チャームिंगな旅》森美術館(日本, 2017年)

- アルテス・ムンディ賞(2008年)
- DAAD ベルリン芸術家プログラム参加(2012年)

© N.S. Harsha, 2018 Courtesy Glynn Vivian Art Gallery, Swansea. Photography_Polly Thomas



Look into my Eyes, ©Artist&Victoria Miro



Untitled (2019), ©Artist&Victoria Miro



Photo by : Shin hamada

SIDE CORE [日本]

SIDE CORE は2012年に高須咲恵と松下徹により活動を開始し、2017年より西広太志が参加。「風景にノイズを起こす」をテーマに、ストリート・カルチャーの視点から公共空間を舞台にしたプロジェクトを展開。展覧会の企画を主な活動としながら、作品を街中に点在させ、建築や壁画、グラフィティを鑑賞しながら街を巡る「MIDNIGHT WALK tour」など、多彩な活動を行う。

代表的な展示：

- ・六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ！（2022年 / 東京）
- ・水の波紋展 2021 消えゆく風景からー新たなランドスケープ（2021年 / 東京）
- ・SIDE CORE / EVERYDAY HOLIDAY SQUAD 個展
「under pressure」（2021年 / 青森）



「六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ！」
森美術館（東京）2022年
撮影：木奥恵三 / 画像提供：森美術館



SIDE CORE EVERYDAY HOLIDAY SQUAD 個展「under pressure」, 2021年
撮影：表恒匡 / 画像提供：国際芸術センター青森



さわひらき [日本 / イギリス]

Hiraki Sawa

石川県生まれ。高校卒業後に渡英、現在はロンドンと金沢を拠点に制作をつづけている。ロンドンの大学、大学院で彫刻を学ぶなかで、友人の手伝いでコンピュータのアニメーションソフトを使ったことがきっかけとなり映像作品を作り始める。撮りためたイメージを、映像がもつ時間軸の中でカラーージュすることで自身の心象風景や記憶の中にある感覚といった実態のない個人的な領域を表現するインスタレーションを展開。映像や立体造形物を巧みに操り再構成することで、現実にはありえない光景を描きながら、どこか親しみを感じさせる世界を作品の中に生み出し、見る人の想像力に働きかける。

近年は映像の配置を絵画的・彫刻的に捉えた空間構成や、立体や平面作品を併置させるなど、映像と展示空間とが互いの領域を交差するような作品に取り組み、世界各地で発表している

主な芸術祭・展覧会：

- 「リヨン・ビエンナーレ」（2003年、2013年、リヨン、フランス）
- 「横浜トリエンナーレ 2005」（2005年、横浜）
- 「Six Good Reason to Stay at Home」National Gallery of Victoria（2006年、メルボルン、オーストラリア）
- 「アーティストファイル」国立新美術館（2008年、東京）
- 「第6回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（2009年、ブリスベン、オーストラリア）
- 「Carrousel」Musée du Temps and Musée National des Beaux-Arts de Besançon（2010年、ブザンソン、フランス）
- 「シドニー・ビエンナーレ」（2010年、シドニー、オーストラリア）
- 「Lineament」資生堂ギャラリー（2012年、東京）
- 「Whirl」神奈川県民ホールギャラリー（2012年、横浜）
- 「Under the Box, Beyond the Bounds」東京オペラシティアートギャラリー（2014年、東京）
- Reborn-Art Festival（2017年、宮城県石巻市）
- 奥能登国際芸術祭（2017年、2021年、石川県珠洲市）
- 「Fantasmagoria」PARAFIN（2018年、ロンドン、イギリス）
- 「潜像の語り手」神奈川芸術劇場（2018年、横浜）など



「flying」2016



「HAKO」2007



ジョ・シン 徐震 [中国]

Xu Zhen

1977年上海生まれ。上海を拠点に活動。

中国の現代アート界を象徴するアーティストとして知られる。2004年には、チャイニーズ・コンテンポラリーアート・アワードにて「ベストアーティスト」賞を受賞する。インスタレーション、ビデオ、絵画、パフォーマンスなど様々な分野で活躍中。

世界各地の美術館やビエンナーレで展示を行っており、代表的なものは、ヴェネツィアビエンナーレ(2001,2005年)、ミュージアム・オブ・モダンアート(ニューヨーク,2004年)、森美術館(東京,2005年)、MoMA PS1(ニューヨーク,2006年)、テートリバプール(2007年)、ヘイワードギャラリー(ロンドン,2012)、リヨンビエンナーレ(2013年)、アーモリーショー(ニューヨーク,2014年)、ロング・ミュージアム(上海,2015年)、アル・リワク・アートセンター(カタール,2016年)、シドニービエンナーレ(2016年)、グッゲンハイム美術館(ニューヨーク,2017年)、シャルジャビエンナーレ(2019年)、ミュージアム・オブ・コンテンポラリーアート(ロサンゼルス,2019年)、オーストラリア国立美術館(キャンベラ,2020年)など。



XU ZHEN® Base, 2021 Installation
iPhone, iPad, MacBook, custom environment, video with sound 74 devices (quantity variable), 1655 x 1040 x 315 cm (dimensions variable), 27' 00" loop



Xu Zhen
Eternity - Northern Qi golden and painted Buddha, Tang Dynasty torso of standing Buddha from Quyang city, Northern Qi painted Bodhisattva, Tang Dynasty seated Buddha from Tianlongshan, Northern Qi painted Buddha, Tang Dynasty torso of a seated Buddha from Tianlongshan grotto No. 4, Parthenon East pediment 2013
Glass fiber-reinforced concrete, marble grains, sandstone grains, steel, mineral pigments
160x150x350 cm



坂茂 [日本]

Shigeru BAN

坂茂建築設計代表取締役
慶應義塾大学環境情報学部教授
日本建築家協会名誉会員
一級建築士、ニューヨーク州登録建築士、ケンタッキー州登録建築士

1957 東京生まれ
1977~80 南カリフォルニア建築大学 (SCI-Arc) 在学
1982~83 磯崎新アトリエ勤務
1984 クーパー・ユニオン卒業、Bachelor of Architecture 取得
1985 坂茂建築設計設立
1995~ NGO ボランティア・アーキテクト・ネットワーク (VAN) を設立
1995~99 国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) コンサルタント
2004 フランス建築アカデミー ゴールドメダル
2006 王立カナダ建築家協会 名誉会員
2008 フランス国家功労勲章 (オフィシエ)
2010 ハーバード大学 GSD 客員教授
2010 フランス芸術文化勲章 (オフィシエ)
2011 オーギュスト・ペレ賞
2012 芸術選奨文部科学大臣賞
2014 プリツカー建築賞
2014 フランス芸術文化勲章 (コマンドゥール)
2017 紫綬褒章
2017 マザー・テレサ社会正義賞
2001~08、2019~ 慶應義塾大学環境情報学部教授
2021~ ニュー・ヨーロピアン・パウハウス委員

主な作品

1995 紙の教会 (兵庫県)
2000 ハノーバー国際博覧会日本館 (ドイツ、ハノーバー)
2005-6 ノマディック美術館 (ニューヨーク、ロサンゼルス、東京)
2010 ポンピドー・センター・メス (フランス、メス)
2013 紙の大聖堂 (ニュージーランド、クライストチャーチ)
2014 アスペン美術館 (アメリカ、コロラド州アスペン)
2015 大分県立美術館 (大分県)
2017 ラ・セヌ・ミュージカル (フランス、パリ郊外)
2017 静岡県富士山世界遺産センター (富士宮市)
2019 台南市美術館 (台湾、台南市)
2019 スウォッチ・オメガ (スイス、ビール/ピエンヌ)
2022 禅坊靖寧 (日本、兵庫県淡路島)



Swatch Headquarters



Center Pompidou-Metz (C) Didier Boy De La Tour



ひびのこづえ [日本] Kodue Hibino

静岡県生まれ 東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。

コスチューム・アーティストとして広告、演劇、ダンス、バレエ、映画、テレビなどその発表の場は、多岐にわたる。NHK E テレ「にほんごであそぼ」のセット衣装を担当。歌舞伎「野田版 研ぎ辰の討たれ」、「桜の森の満開の下」現代劇の野田秀樹作・演出の「ザ・キャラクター」「フェイスピア」「Q」など多数の舞台衣装を担当。ダンス「サーカス」新国立劇場、ダンス「不思議の国アリス」、「星の王子さま」KAAT 衣装担当。「LIVE BONE」「WONDER WATER」「Humanoid LADY」「FLY,FLY,FLY」「Rinne」「Piece to Peace」「UP AND DOWN」「ROOT」「MAMMOTH」「RYU」のパフォーマンスを展開中。奥能登国際芸術祭 2017、2020+、大地の芸術祭 2018、瀬戸内国際芸術祭 2019、2022 に参加。2018 個展「60rokuju」市原湖畔美術館。2019 個展「ダンスザイフク」太宰府天満宮／九州国立博物館、2021 個展「森に棲む服」そごう美術館、2022 個展「不思議の森に棲む服」熊本市現代美術館。

2021 紀伊国屋演劇賞個人賞

主な展覧会

「不思議の森に棲む服」熊本市現代美術館（熊本）、2022 年

「森に棲む服」そごう美術館（神奈川）、2021 年

第 4 回瀬戸内国際芸術祭（香川 / 岡山）、2019 年

「60rokuju」市原湖畔美術館（千葉）、2018 年



『WONDER WATER / ホワイトアスバラガス
(谷口界、ハチロウ)』 Photo by 出口敏行



『Piece to Peace / 島地保武、酒井はな』
Photo by 出口敏行